

不識庵棧山撃の囀是

頼山陽

鞭声 肅肅 夜河を 過る

暁 見る 千兵 大牙 擁

遺恨 十年 一剣を 磨き

流星 光底 長蛇を 逸す

【作者】頼 山陽（一七八〇〜一八三三年）江戸後期の学者・漢詩人。広島県竹原市の人で、安芸藩儒者春水の長男として生まれた。

少年時代から詩文を得意とし周囲を驚かせた。十八歳で江戸の昌平覺学問所で学んだ。ただ素行に常軌を逸脱することが多く、最初の結婚は長く続かず家族を悩ませた。二十一歳で京都に走ったため、脱藩の罪で四年間自邸に幽閉された。しかしこの間読書にふけり、のちの「日本外史」の案がなったといわれる。三十二歳ごろから京都に定住し、「山紫水明処」という塾を開き子弟の育成と学問に励んだ。子供に安政の大獄で処刑された三樹三郎がいる。享年五十三歳。

【語釈】 *肅 肅…もの静かなさま。 *大 牙…上杉軍の大将の旗印。 *擁…抱きかかえる。 *持つ。

*遺 恨…残念な。 *流星光底…流星の飛ぶ如く剣を抜いて切り下げた時の光

*長 蛇…目指す大敵。 ここでは信玄を指す。

【通釈】（上杉謙信の軍は）鞭の音もたてないように静かに、夜に乗じて川を渡った。明け方、武田信玄方は、上杉の数千の大軍が

大将の旗を立てて、突然面前に現れたのを見て、大いに驚いた。しかし、まことに残念なことには、この十数年来、一剣を磨きに磨いてきたのに、打ち下ろす刃（やいば）がキラッと光る一瞬のうちに、あの憎い信玄を打ちもらしてしまった。